

# 子育ての探究 その四

## 絵画資料からみた平安時代の庶民の親子像

柴崎 正行

### 文学的資料の限界

前回の子育ての探究では、平安京の貴族階層の親子像について調べてみた。資料としては「今昔物語」や「源氏物語」さらには「枕草子」といった当時の物語や日記さらには紀行文などを検討した。そして今回も

それと同じ手法で当時の庶民の子育てについて検討を試みようとしたが、それは困難であることがわかってきた。その理由は、文字に書かれた当時の資料は、貴族階層の生活については詳しくふれてはいるものの、庶民階層の生活についてはほとんどふれていないのである。文字の書き手であり読み手でもある貴族

階層にとつて、より高貴な人々の生活には関心があつても、庶民の生活など知らないし、また知る必要もなかったたのであろう。

このことは当時の社会において文字という伝達手段が、貴族階層という限られた人々によつてのみ独占されていたことを示すことにもなる。確かに当時の庶民階層は農耕や漁業中心の生活であり、人から人へと生活経験や出来事を伝えていくための伝達手段は口話を中心であり、まだ文字の読み書きを必要としなかつた。そのためほとんど庶民は読み書きができず、したがつて自分たちの子育ての様子を書き記したり、文字で物語を書き表すこともしなかつた。そのために文字に書かれた当時の資料から平安時代の庶民の子育てを検討することはなかなか困難なのである。

### 絵画資料の有効性

こうした文字資料の限界を補うために、今回は絵画

資料を用いてみることにした。私自身は絵を観たり描いたりすることが大好きで、高専時代には美術部にも所属していたほどである。特に水彩画や水墨画を中心とした日本画が好きで、雪舟の雪景色や近年の東山魁夷の自然などを描いた作品が大好きである。そのために日本の絵画史にも興味があり、浮世絵などで子育ての様子を描いた画集などが出されると集めたりもした。

そこで今回は十二世紀末までの平安時代に描かれた絵画資料を検討することによつて、そこに描かれている庶民階層の親子像を分析してみることにする。そうした観点から十二世紀までの絵画資料を探してみると(注1)、次の六点が取りあげられていた。

「源氏物語絵巻」 十二世紀

「餓鬼草紙」(二卷) 十二世紀

「信貴山縁起」(三卷) 十二世紀

「地獄草紙」(四卷) 十二世紀

「年中行事絵巻」(十六卷) 十二世紀

「伴大納言絵詞」(三卷) 十二世紀

これらの絵巻や絵詞、縁起や草紙が書かれた背景には、三つの理由が考えられる。

第一には「飢餓草紙」や「地獄草紙」のように、地獄や餓鬼の恐ろしさを絵画という視覚的手段に訴えることよって、より多くの人々に宗教心を呼び起こそうとしたこと。第二には「源氏物語」や「信貴山縁起」、「伴大納言絵詞」のように、当時の人気者であった光源氏(源氏物語)や寺社(大和信貴山)さらには応天門の変という事件(伴大納言)などを題材に取り上げて物語化して描いたこと。さらに第三には、当時の貴族の人々にとって大事なことであった宮中行事への出席の仕方やその展開の仕方などを描いて伝えようとしたことである。

このように十二世紀に描かれた絵画資料は、文字では表現しきれない恐ろしい姿さらには物語などの具体

的な様子などを幅広く含んでおり、その伝える内容には貴族の生活する姿に混じって当時の庶民の生活ぶりが付録のように描かれていた。そこで次には、これらの絵画資料に平安時代の庶民の子育てがどのように描かれているかを概観してみることにする。

### 「餓鬼草紙」に描かれた出産

この草紙は平安末期に描かれたものである。餓鬼道におちた餓鬼たちの凄惨な姿を迫力ある絵で描いている。その絵の中では「伺嬰兒便餓鬼」に出産の場面が詳しく表現されている(注3)。

地方の豪族らしい邸宅の産屋は、畳も含めて白一色に統一されている。産婦だけでなくお産に立ち会う数人の女性も全員白無垢である。男児が誕生したばかりの場面であり、その側で餓鬼が舌なめずりしながら今にも嬰兒を襲おうとしている。この餓鬼は前世でわが子を失い、その悲しさのあまりに夜叉に変身して、子

どもを殺そうとさまよってきたのであろうか。

この場面から、平安時代において出産はすでに産屋で行われており、男子禁制になっていたことがわかる。しかも関係者全員が白無垢に着替えて立ち会っていたこともわかる。貧しい庶民の家庭においても同じように出産していたかどうかはわからないが、豪族以上の家庭ではすでに平安時代においてこうした出産方法が行われていたのであろう。またこの時代には出産に失敗して嬰兒を失ったり、あるいは産婦も死に至ることも多かったであろう。その悔しさや無念さは、その女性を夜叉に変えてしまうこともあったかもしれない。そのくらい母のわが子を思う気持ちは強かつたともいえる。そうした気持ちは現在でも強いのであるが、平安時代においても同じであったといえるのではないか。

### 「信貴山縁起絵巻」に描かれた子育て

この絵巻は、大和信貴山の命運に関わる奇跡的な物

語を描いたものであり、平安初期のものといわれている（注3）。その「尼僧の巻」は、信貴山の高僧である命運の姉が尼僧となって弟に会いに行く旅の行程を描いたものである。この巻には、尼僧と街道の人々との交歓風景がしばしば描かれている。

尼僧一行が奈良の街道を歩いていき、街道筋の民家に弟の所在をたずねたところ、杖をついた老夫婦が出てきて話している場面がある（注1）。この場面には老夫婦の側に授乳中の嫁が描かれており、その赤子は裸であり乳房をくわえて幸せそうに見える。またその民家の入り口では食事中だったのか着物一枚を着流した六、七歳の男児がお椀と箸を持ったままその様子を見ている。また同じく街道の民家では犬を追い払うために窓から



棒を振っている夫婦がいるが、その側に女兒がおり着物を着流している。その夫婦のうち妻は二歳位の裸の幼児を抱いている（注2）。この巻では大和地方の農村風景を描いた場面もあるが、その中に菜を摘み取る女性が二人いる。その一人の女性は赤子をおぶって仕事をしている（注2）。このことから、当時の母親はわが子をおぶったまま、畑仕事をしていたことがわかる。

また「飛倉の巻」は、山城山崎の長者の屋敷から倉が飛んでいく話を描いたものである（注1）。その中で、空中に飛び上がった倉に人々が驚き騒ぐ場面があるが、その人々の中に驚いて倉を見上げている母親の背に裸の乳児が半纏でおぶわれて眠っている。周囲の騒ぎも気にせず安心して眠っているその姿には、母親におぶわれて眠る赤ちゃんは幸せそのものだという描き手の思いが感じられる。

### 「伴大納言絵詞」に描かれた子育て

この絵詞は、応天門の変（八六六年）の顛末を語る説話を絵巻物化したものである。応天門が放火され炎上した事件の容疑者として大納言の伴善男が伊豆に流されるまでの話を描いている。この絵詞は風俗的な資料としての価値も高く、院政期の子どもの姿を描いているので貴重であるという（注1）。

その中巻には、京都の町中で子どもの喧嘩が発生し、そこに父親が介入している場面がある。子どもの喧嘩に父親が口をはさみ、自分の子どもをかばって相手の子どもを蹴飛ばしている場面があるが、その姿は庶民というより下級貴族と思われる（注1）。周りの人々もその成り行きをあんまりだという苦笑いの表情で見ている。いつの時代も、わが子のことになると周りが見えなくなる親はいるものである。

同じく中巻には、舎人夫婦が伴大納言の犯罪を暴露

しているのを、たぐさんの見物人が聞いている場面がある（注1）。その見物人の中に老女が孫らしい裸の赤子を服にくるんで抱いている姿がみられる。その横に母親らしき女性がいることから、孫を抱きながら娘と一緒に見物に来たのであろう。いつの時代も母親は娘の子の世話をするものである。

### 「年中行事絵巻」に描かれた子育て

この絵巻は平安末期に京都の年中行事を描いているが、かなりこまやかに京都の行事の風景を描いてくれている。そのため、当時の庶民の生活ぶりを理解するための貴重な資料であるともいえる。

「鬮鶏」は平安時代から流行ったもので三月三日に行うのが慣例となった。神酒と供物が供えられた朱塗りの明神の前で行われ、庶民が多く見物した様子が描かれている（注1）。その中には母親や父親に連れられた子どもたちの姿も見える。こうした行事には当時は

庶民も親子で見物に参加していたことが窺われる。

「印地打ち」は五月五日の端午の節句に、大勢の大人や子どもたちが二手に分かれて石を投げ合い、合戦の真似ごとをした行事である。こうした行事の周辺にはそれを見物している女性や子どもがよく描かれており、その中には母親におんぶされている赤子の姿もみられる（注1）。

また「毬杖」はホッケーに似た遊びで杖で毬を打って遊ぶものであるが、正月によく行われた遊びである。その遊びには大人たちに混じって遊ぶ十歳位の子どもたちの姿が描かれており（注1）、大人も子どもと共に興じた遊びであることがわかる。このように平安時代においても、庶民は親子で遊ぶことがあったようである。

### 平安時代の庶民の親子像

以上の絵画資料の読み取りから平安時代の庶民の親

子像にせまってみたいと思う。

まずは家族の構成員からみると、多くの絵巻において老夫婦と母子が描かれていたことから、親子三代で一つの家に同居することが多いらしいことがわかる。またいくつかの場面では夫の存在が明確ではないが、これは夫が昼間は仕事に出かけているために不在なためなのか、あるいは貴族と同じように庶民も当時は夫が通い婚であったために昼間はいなかったのか、この資料だけではよくわからない。

次に当時の乳児の世話は母親がすることもあるし、老女(祖母)がすることもあったが、ほとんどの場合で大人の女性が子守をしていた。またはほとんどの場合において、乳児は裸のままおぶわれたり抱かれたりしており、寒そうなきにのみ半纏のような服で包まれていた。これは幼児でも同じであり、裸でいたり着ていたとしても粗末な産着や着物を一枚だけ身につけて着流しているだけであった。

また子どもたちは親の仕事や地域の行事に付いていつて側で見学したり、時には大人の遊びと一緒に参加するなど、大人の生活に深く入り込んでいた。そして親子の心理的な絆は強く、時にはその情念が母親を夜叉に変えるほどであった。こうした親子の生活の在り方や心理的な絆は、貴族階層の親子像とはまったく異なるものであった。

(東京家政大学)

#### 注

- 1 黒田日出男「絵巻」子どもの登場―中世社会の子ども像―  
―河出書房社 一九八九年
- 2 毎日新聞社 復元の日本史「説話絵巻―庶民の世界―」  
毎日新聞社 一九九二年
- 3 塩川京子「描かれた女たち―絵巻の主婦像から昭和の美人画まで―」(朝日選書)朝日新聞社 一九九九年